



舟入川と山田ぜき・野中兼山

ずぶ濡れになりながら、楽しそうに遊んでいた学校帰りの子供たち。最近こういう光景を目にすることも少なくなりました。

舟入川の歴史を考えると、野中兼山の業績と山田ぜきの存在抜きには考えられないであろう。兼山の時代（一六三〇年ごろ）の幕藩体制は農業経済が基盤となり、特に年貢米を確保する点にあり、農民の労働生産と夫役の徴収が重要な意味を持っていた。

土佐藩においても、幕府の課す公役負担の義務を果たさねばならず、新田の開発が当面の重要な課題であった。

兼山は二代藩主忠義の信任を受け、寛永八年（一六三二年）より約三十年にわたって藩政を推進していった。その事業は多岐にわたり、とくに用水路の建設による新田の開発は藩の

要請に答えるものであった。なかでも山田ぜきは、物部川の水資源を利用した、現在のダム建設に相当するもので、我が南国市は山田ぜきによって大きな恩恵を受けており、後免町の成立と共に兼山を忘れることはできないのである。

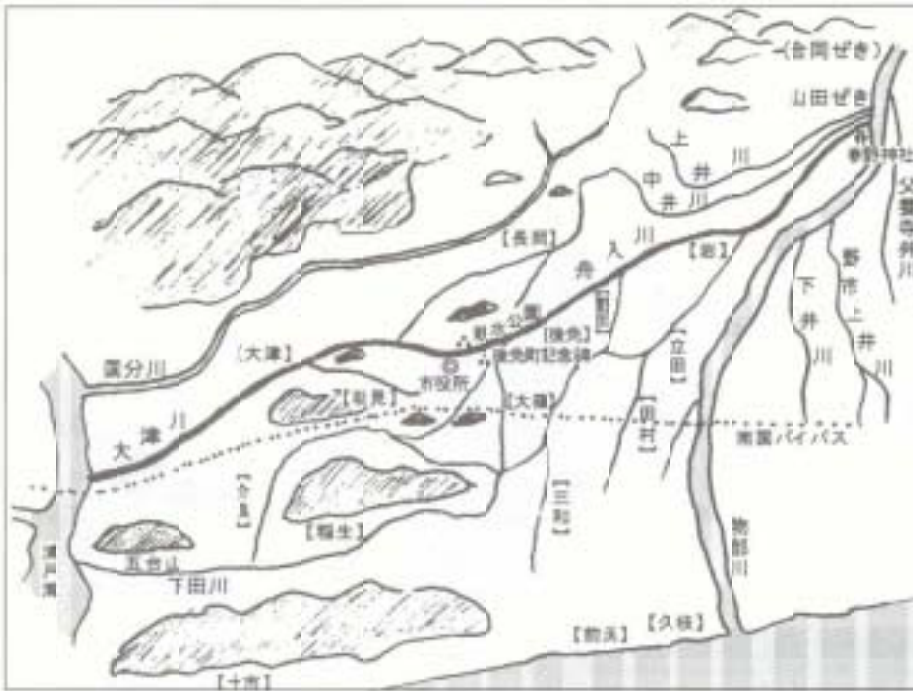
山田ぜきにより物部川の水資源の導入に成功した舟入川は、山田ぜきに始まり、南流して土佐山田町岩瀬で西に折れて中野を経て西南に長岡右地のすそを流れ、南国市を西に出で藤原を通り、長崎山の北側を西走して高知市大津で大津川と合流して西に進み、大津・高須を経て島田で国分川に入る約十二。余りの流程を持つている。

舟入川といえは江戸末期、野中兼山によりつくられ、以来、香長平野をつらぬき、地質の輸送経路として利用されてきました。  
今回の南国再発見では、現在まで住民生活に密接に関わりあってきた舟入川の歴史に、スポットをあてたいと思います。

舟入川の名前は、高知城下から山田ぜきまで舟を乗り入れることができたから自然とその名が付いたとさ



昭和58年の改修前の舟入川の様子（上）と現在の様子（下）：上野田



れているが、一説では二代藩主山内忠義が川狩りに出て井口まで行ったために舟入川ということになったとも伝えられている。

舟入川の灌がい範囲は、土佐山田町の一部、旧岩村、立田、田村、野田、大藤、三和、伊達野、介良村、日長岡村の東崎および小籠、野中の一部、実に一三三二町歩（一三二一町）をうるおしている。県内はもとより、全国まれに見る灌がい区域の広い流水である。まさに県下に誇る我が香長平野の命の水といえよう。

舟入川は、灌がいにも必要であったが、その名の通り舟運にも利用されていた。物資を運ぶには、馬しかなくった藩政時代には、二百余年の長きにわたり社会に公益を与えた交通機関となっ



八月号の南国再発見では、広報委員会がゴムボートを使って実際に舟入川を下ってみました。その様子をレポートします。

ていたのが、舟入川の水運であった。昔この舟入川を利用して、高知城下に運ばれたものは、物部川上流の山間部より木材・木炭・製紙原料など、また平野部からは米・穀物などが舟によって運ばれ、大木などは後に組まれこの川を下っていった。舟入川通行の舟について一銭・後について一銭四厘とそれぞれ使用料を徴収して藩に収められていた。  
物が動くということは、そこには当然人と人との交流が生まれ、情報の交換が行われる。そう考えてこの川を見た時、当時の舟入川の果たした役割は計り知れない。先人の努力と苦勞を思い、我が郷土南国市を流れる舟入川を今一度見直してみたいものである。

三十一歳と若く、今後の発展が期待されます。

商店開発においても、チャレンジ精神が生かされていて、システック独自の製品が最近新聞でも話題になりました。この商品は、パソコンと電話回線を持ち、登録した電話番号に自動的にダイヤルして用件を伝え、相手からの返事の内容を取りまとめることができる、というシステムです。この端末機はパソコンの機種を選ばないというこれまでにない特徴があります。

沖田さんは、官公庁の業務改善にも応用が可能なため、南国市のためにもお役に立てれば、と抱負を語ってくれました。



通信機器メーカー システック



おごりません。おごりません。

最近では、マルチメディアという言葉が新聞、雑誌などで目につきますが、これに関係する情報通信分野は、今後急速に発展するのではないかと、と語られています。今回は、藤原にある通信機器メーカー「システック」を訪ね、社長の沖田さんに話を聞きました。  
システックでは、主として電話回線を使った通信機器を設計、開発しており、昭和六十一年に沖田さんが設立しました。元々は、鈴江農機に勤めていたとのことですが、単身で企業家として独立、今年で設立九年目になります。売上額も順調に伸び、現在では二億五千万を超えています。十五人いる社員の平均年齢は